

神経筋難病病棟に勤務する療養介助員のポジショニングに関する

知識・技術向上に向けての取り組み

～理学療法士による学習会を行って～

橘伸吾¹⁾ 中村一貴¹⁾ 伊藤光治¹⁾ 鈴木清美¹⁾ 圓井和恵¹⁾
神農祐子¹⁾ 澤田誠²⁾

- 1) 国立病院機構鳥取医療センター看護部 1 病棟
- 2) 国立病院機構鳥取医療センターリハビリテーション科

Shingo Tachibana^{1),*} Kazuki Nakamura¹⁾, Kohji Ito¹⁾, Kiyomi Suzuki¹⁾,
Kazue Marui¹⁾, Yuko Shino¹⁾, Makoto Sawada²⁾

- 1) 1st Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center
- 2) Department of Rehabilitation, NHO Tottori Medical Center

*Correspondence: byoutou1@tottori-iryō.hosp.go.jp

要旨

私たち療養介助員（以下、介助員とする）は、人工呼吸器装着患者のポジショニングを看護師とペアで行っている。しかし、実際行っているポジショニングは、看護師・介助員によって患者に使用している枕がまちまちであったり、枕の位置が異なっていることがある。このように、介助員個々でポジショニングの細かい方法が異なるため、患者に合った正しいポジショニングを提供できていない。しかし、ポジショニングについての知識がなく、行っていることに疑問を感じていながら、学習会を行ったことがなかった。そこで、理学療法士によるポジショニングの学習会を行い、学習会前後にアンケートを実施し、ポジショニングに関する介助員の知識・技術に変化が起きたかを明らかにした。鳥取臨床科学 7(2), 135-139, 2016

Key Words: ポジショニング, 介助員, 意識, 学習会, アンケート

はじめに

私たち A 病院の療養介助員（以下、介助員とする）は、人工呼吸器装着患者のポジショニングを看護師とペアで行っている。しかし、実際行っているポジショニングは、看護師・介助員によって患者に使用している枕がまちまちであったり、枕の位置が異なっていることがある。また、患者の麻痺・拘縮・変形などを考慮し意識して、ポジショニングを行えていないため、

適切な側臥位が出来ていないことがある。このように、介助員個々でポジショニングの細かい方法が異なるため、患者に合った正しいポジショニングが提供できていない。しかし介助員は、ポジショニングについての専門的な知識がなく行っていることに疑問を感じていながら、学習会を行ったことがなかった。そこで今回、理学療法士によるポジショニングの学習会を行い、学習会前後にアンケートを実施し、ポジショニ